

あらゆる歴史に関する学問を動員する。

考古学・文化財科学コース 上野 淳也

考古学・文化財科学コースで、歴史考古学、特に戦国時代の考古学を教えている上野です。現在、特に関心を持って研究している事は、日本への大砲伝来についてです。鉄砲伝来についての研究は、とても多いのですが、大砲の伝来に関しては、とても少ない。「では、私が。」と思って始めたのですが、これがとても面白い。最近になって、ロシアで大友宗麟の大砲が発見される等、新展開にも恵まれました。



日本への大砲伝来を調査するには、まず、大砲がどのように日本へ渡ってきたのかを調べなければなりません。まず、世界史。西洋史、特にポルトガルやスペインの歴史を調べ、これらの国々がアジアで作った植民都市の歴史を調べます。具体的には、ゴアやマラッカ、マカオについてです。すなわち、南アジア・東南アジア・中国史の東洋史です。これらを調べると、当時中国を治めていた大明帝国が、1520年代にはポルトガルから大砲を奪い手に入っていた事がわかってきました。ポルトガル語や漢文等、あらゆる言語の史料を手に入れてゆきます。そして、日本での大砲に関する最古の記録はというと、1560年の足利義晴から大友宗麟への手紙です。古文書だって読みます。

さて、ここまでで、1520年代から1550年代までの間に、日本に大砲が伝来したであろうという「仮説」が立てられます。これを、如何に証明するのか。

ここで、考古学の登場です。世界中に残されている「日本で作られた」或いは「日本で使われた」実物の大砲の資料を調査するのです。メジャーを片手に詳細な図面を描き、特徴をメモする。どのように形や紋様が変わって行ったのかを考えるためです。そして、大砲から粟粒ひとつにも満たない金属サンプルを採取します。これを、蛍光X線分析（どのような成分が入っているのかわかります。）や鉛同位体比分析（どこの鉱山の鉱石が原材料かわかります。）という理化学的な分析の資料とします。調査に科学的な裏付けを持たせる為です。現在のところ、私の研究では、大砲伝来は1540～1550年代の間と考えています。そして、日本で最初に大砲を作ることになったのは、大友宗麟であったと考えています。そして、その大砲の普及は、豊臣秀吉の時代から徳川家康の時代にかけて成熟してゆくのです。

現在は、戦国時代を世界史の中に位置付け、これらの重火器が世界史の展開にどのように影響を与えていったのかという事を考え始めています。大砲伝来から、17世紀の軍事革命の意味を考える試みを始めています。

別府大学では、西洋史・東洋史・日本史、そして考古学の全てを学ぶ事ができます。そして、それらの知識を総動員して歴史の謎を解いてゆきます。

そうそう、言い忘れていました。私は、その別府大学の卒業生です。

歴史のとびら 表紙の写真

表紙の写真は、メキシコのユカタン半島にあるカラクムル遺跡の建造物Ⅰ。カラクムルは、古典期マヤ社会（3世紀頃～10世紀頃）最大級の国家の首都で、絶頂期の支配領域は13000km²、総人口は175万人にも達した。現在面積30km²以上の範囲に6250の建築物が確認されている。建造物Ⅰは、その中で二番目に大きなもので、高さ50m、底辺95×85mの威容を誇る。

遺跡は広大な密林地帯の真ただ中にある。メキシコは、多数の動植物が生息する世界でも有数の国だが、カラクムル遺跡周辺はとりわけこのような自然資源に恵まれている。遺跡の持つ歴史文化的価値に加えて、周囲の生態系全体の価値が評価され、2002年にユネスコ世界遺産の複合遺産に登録され、更に2014年には追加登録された。
(世界史コース 佐藤孝裕)

歴史のとびら

2号 2016年2月29日発行

目次

表紙写真	カラクムル遺跡の建造物Ⅰ	1
学科イベント活動紹介		2～3
	史学研究会大会と学生部会発表会（史学研究会会長 山本晴樹）	
	第2回・第3回オープンキャンパス（日本史・アーカイブズコース 白峰旬）	
	海外研修（考古学・文化財科学コース 田中裕介）	
学生研究室活動紹介		3
	近世近代史研究室（3年生 北川裕基）	
教員の小窓		
	あらゆる歴史に関する学問を動員する（考古学・文化財科学コース 上野淳也）	4
	表紙写真の解説（世界史コース 佐藤孝裕）	4



9月	シンポジウム「条里と道と祭祀～古代ローマと日本をつなぐ～」(別府大学・中津市共催)
10月	3年生進路懇談会
11月	史学研究会学生部会発表会
1月	4年生卒業論文提出 / 九州学シンポジウム「観光アイランド九州」
2月	地域連携シンポジウム「臼杵磨崖仏への100年のまなざし」(別府大学・臼杵市連携事業)
3月	卒業式

史学研究会大会

史学研究会会長 山本晴樹



平成27年度の史学研究会大会は6月20日に開催されました。まず、本学教員の講演として山本晴樹教授による講演「古代地中海世界の都市・農村遺跡—スペイン東北部(カタルーニャ地方)のローマ遺跡—」があり、その後大分県中津市教育委員会文化財課主任で本学卒業生の三谷紘平氏による記念講演「自著『シリーズ藩物語 中津藩』を語る」がありました。三谷氏にはご著書『シリーズ藩物語 中津藩』(現代書館2014年)に対して第一回史学研究会研究奨励賞が授与されました。この研究奨励賞は満40歳以下の若手研究者に授与されるもので、三谷氏の今後の活躍が期待されます。

また平成27年度の史学研究会学生部会学生研究発表会は11月21日と22日の二日間にわたって開催されました。今回は15周年を記念して、本学の下村智教授の「円通寺遺跡の発掘調査—大学構内は宝箱」と題する記念講演があり、その後二日間にわたって14の研究会在研究発表

をおこないました。各研究室の発表内容は次のとおりです。

第一日目午後の部では、戦史研究室「ローマ軍の生活」、民俗学研究室「湯あみ祭り」、アーカイブズ・史料学研究室「森家文書の調査報告」、文明学研究室「古典期マヤにおける政治支配体制」。

第二日目の午前の部では、西洋史研究室「イギリス革命」、東洋史友永研究室「春秋戦国での「秦」、考古学研究室「南九州における地下式横穴墓」、アジア史研究室「西アジア文化」、女性史研究室「日本上流階級女性の衣服変遷」、日本古代史・中世史研究室「大友氏と元寇合戦」。

午後の部では、日本城郭研究室「安土城についての考察」、歴史美術研究室「曾我簫白」、文化財科学研究室「文化財科学について及び文化財科学研究室の活動と課題」、日本近世史近代史研究室「鎖国期における長崎貿易の実態について」。いずれの研究室も一年間の研究成果がよくでた発表でした。

第2回・第3回オープンキャンパスを終えて

日本史・アーカイブコース 白峰旬



7月20日(月)に第2回オープンキャンパス、8月16日(日)に第3回オープンキャンパスが実施されました。両日ともに、全体説明会のあと、史学・文化財学科志望の高校生を対象とした模擬授業など学科による企画が実施されました。

第2回オープンキャンパスの模擬授業では、田村憲美教授(日本中世史)による「気候の変動と日本史」、段上達雄教授(日本民俗学)による「戦後日本人の妖怪の受容」、第3回オープンキャンパスの模擬授業では針谷武志教授(アーカイブズ学、日本近世近代史)による「和宮と幕末動乱」、利光正文教授(アジア史)による「イスラム原理主義(過激派)の歴史」がおこなわれました。参加者は第2回オープンキャンパスは42名、第3回オープンキャンパスは45名で、大変多くの高校生が参加してくれました。昼食後、午後には、第2回オープンキャンパスでは附属図書館2階で学芸員課程、アーキビスト養成課程など

のコーナーを見学し、第3回オープンキャンパスでは、アーカイブズセンターの資料展示、及び、大学に隣接する香りの博物館を見学しました。いずれも参加した高校生にとっては貴重な体験になったと思います。

【当日の日程】10時45分～55分:学科紹介 → 10時55分～12時:模擬授業 → 12時～:昼食 →13時～14時30分:香りの博物館など見学

【来年度のオープンキャンパス】

本学のオープンキャンパスは毎年4月、7月、8月に実施されています。来年も興味のある高校生は是非参加してください。

海外研修

考古学・文化財科学コース 田中裕介



世界遺産研修 今年北イタリア行ってきました。

まだ暑い9月3日から10日まで7泊8日教員2名、学生28名が添乗員1名とともに世界遺産研修に行っていました。ミラノからイタリア入りし、ベネチア、フィレンツェ、ピサをへてローマに向かうという旅路です。途中ベネチアで雨に降られた以外は好天にめぐまれ、一人の病人事故(迷子はありませんでしたが)もなく帰ってきました。

旅の目的は古代から中世の世界の首都ともいえるローマ、ベネチア、フィレンツェなどの古都の歴史的な遺産を見て廻ることでした。ローマではコロッセオを起点にフォロ・ロマーノとパンテオンなどの2000年前のローマ時代の巨大な建物のなかに入りました。途中市内や郊外に石造りの水道橋が見えました。バチカン美術館にはいつてシステナ礼拝堂のミケランジェロの壁画とサンピエトロ寺院を巡りました。ベネチアでは小雨の中船で寄り付き中心部のドゥカーレ宮殿を見学し

てサンマルコ広場から、6人ずつ名物のゴンドラに乗り遊覧し。フィレンツェでは旧市街中心部を歩いて横切りアルノ河畔のウフィツィ美術館に入場し、ボッティチェリの作品をみましたが見学者でごった返していました。中世のイタリアの豊かさにはローマ時代に劣らず驚きです。途中ピサの斜塔に上がってきました、ほんとに傾いていました、しかもてっぺんまで上ることができたのに驚きました。さらに周囲を見渡すと中世の街並みのままのピサの街が360度広がっています。ミラノではスフォルツェスコ城(ミラノの王宮)内の美術館とくにミケランジェロのピエタなどをみる。さらにヴィットリオ・エマヌエーレ2世のガレリアを歩いて19世紀のイタリアでさえ絢爛たるつくりヨーロッパの19世紀を感じました。

ミラノからフィレンツェまでは長期よりバスで強行軍でしたが、ロンバルディアの平原や、トスカーナの田園の美しさを垣間見、ローマでは市内で宿泊したのでジェラートやパル(カフェ)で楽しむ余裕もありました。海外研修は2年に一度ですが、世界が一気に広がります。とくに学生には参加を勧めます。

日本近世近代史研究室

3年生 北川裕基



日本近世史近代史研究室は、現在1年生6名、2年生6名、3年生9名の計21名で顧問の針谷先生のご指導の下、日々の活動に取り組んでいます。その名の通り、日本の近世史と近代史を研究対象の中心とし、それ以外に現代史も研究範囲としています。また、研究内容については、事柄や人物、文化など様々な面から主に文献史料を多様に用いて調査・研究を行っています。これまでの研究室の活動としては、個人研究や発表会に向けてのグループ研究、通史、古文書読解などを行っており、今年度からは本格的に古文書読解に力を入れ、室員一人ひとりの知識の枠を広げることを目標として活動に取り組んでいます。また、学外の活動としてはフィールドワークや研修旅行を実施し、実際に自分の目で見て、肌で感じることによって室員の歴史に対する興味・関心をより一層引き出し、その後の研究室活動をより良いものとするようにと考えています。

昨年度の活動としては研修旅行で京都へ行き、多くの歴史建造物を見学したり、貴重な話などが聞けたりと自分たちの知らないことをたくさん学び良い経験となりました。また、研究発表に関しては皆で意見を交換し合いながら納得いくまで発表テーマについて追及し、良いものを作り上げることができました。

研究室では活動を通して、勉学に励み、自らがやるべきことについて研究を行うのはもちろんのことですが、それ以外にも室員一人ひとりのコミュニケーション能力を高めることや報告・連絡・相談(ホウレンソウ)の徹底などといった社会に出ても恥ずかしくないような人間・人格づくりも研究室の目標の一つとしています。それらを養うために研究室で自らが思ったことをきちんと発言したり、他の室員と意見交換をしたりと常に言葉が飛び交うような研究室にすることを心掛けています。

今後の研究室活動も、室員一人ひとり自分たちがすべきことをしっかりと果たし、11月に行われる史学研究会研究発表会で良い結果を残せるように一所懸命取り組んでいきたいと思っています。